6．鼻アレルギーに対するヒスタグロビンネビュライザー療法
——特にステロイドとの併用療法を中心として——

藤谷哲造（神戸大）
小笠原寛（兵庫医大）
中川　巌（三菱神戸病院）
鳥山一清、山本松紀（川崎病院）
森本大和、井上健造（神鋼病院）
高原哲夫（神戸労災病院）

ヒスタグロビン(HG) は従来皮下注射のみで使用されてきた。しかしＨＧの持つ種々の薬理作用のうち、肥満細胞からの脱顆粒抑制作用あるいは、Scheiffarthらの言うshock organ receptor blook説などから考えられ既にＨＧの鼻粘膜局所へのネビュライザー・エアロゾル療法について、２、３の報告がある。一方現在鼻アレルギーへのネビュライザー療法としてステロイド剤が最も繁用されている。今回通年性の鼻アレルギーに対してＨＧ単独使用群とステロイド併用群の治療成績を７施設協同で検討した。

対象はアレルギー検査で鼻アレルギーと判定された患者で、年令10才以上、通年性の患者を選んだ。減感作で既に維持量を投与中の場合は継続したが、原則として抗アレルギー剤の併用はさけた。

薬剤はＨＧ１バイアルを４mlの蒸留水に溶解し１回１mlを週３回、４週間計12回投与した。また対照群はＨＧ１バイアルを２mlに溶解したもの0.5mlとデキサメタゾン0.2mgを含む0.5mlを混合し１mlを１回使用量とし、単独群と同様に投与した。

効果の判定にあたって、重症度、鼻症状の程度、粘膜所見の程度は奥田の方法に従った。

自覚症状および鼻腔所見から主治医が総合効果判定を行った。また症状、所見別効果の判定も行った。全ての患者はハウスダスト陽性で、治療前後に採血し、Dermatophagoideus farinaeのRAST scoreの変化を測定した。治療前後の血清のヒスタミン固定能(HPP) を、ホルマリン処理ヒツジ赤血球凝集阻止法で測定した。

<結　　果>

綜合判定では、ＨＧ単独群21例中有効以上は14例で、ステロイド併用群13例では８例であり、両群の間には有意差を認めなかった。

病型別有効率は両群に差を認めなかった。自覚所見の変動では、鼻汁はややＨＧ単独群で減少が多いが、くしゃみ、鼻閉、日常生活の支障度とも、両群間に有意差を認めなかった。

他覚所見でも、下甲介の腫脹の改善、水性分泌の減少、鼻汁中好酸球の変化、粘膜の色調とも両群間に有意の差は認められなかった。

効果発現時期は、ＨＧ単独群では66.7%が、ステロイド併用群では90%が２週間以内で、ステロイド併用群の方が効果発現が早い傾向を示した。

RAST scoreの変化は、ＨＧ単独群では20例中２例が改善し、１例が悪化した。ステロイド併用群では、11例中４例が改善し、３例が悪化した。ＨＰＰ値の変化は、ＨＧ単独群では20例中９例が改善し、２例が悪化した。ステロイド併用群では11例中３例が改善し、２例が悪化した。ＨＧ単独群の凝集阻止価の上昇は、特に著効、有効例に多くみられた。

ＨＧ単独および、ＨＧ、デキサメタゾン併用によるネビュライザー療法の群間比較を行った結果、両群とも60%以上の有効率が認められた。効果発現はステロイド併用群が早い傾向を示した。ステロイド併用群ではＨＰＰの変動は少ないが、ＨＧ単独では凝集阻止価の上昇が多かった。ＨＧは鼻粘膜より吸収され、全身への影響があるものと考えられた。

鼻アレルギーに対するＨＧネビュライザー治療にあたって、ステロイドの併用は速効性を求めるときのみに使用し、２週以後はＨＧ単独使用が有用であると考えられる。